

對蒙戦争・講和の過程と高麗の政權を取り巻く環境の変化

イ・ミョンミ (ソウル大学)

[原文は韓国語、翻訳：全相律 (東京大学)]

【目次】

- ・ 導入-講和のためのモンゴルの要求条件、「モンゴルの(従属)関係」の形成方法
 - ・ 国王親朝要求の解釈と対応-宗室の外交活動：講和交渉の使行団引率
 - ・ トルガク[禿魯花、turγax]の派遣と宗室のケシク参加
 - ・ 結び
- 〈参考資料〉 モンゴル服属期の高麗国王の位継承図

導入-講和のための、モンゴルの要求条件、「モンゴルの(従属)関係」の形成方法

1231年、モンゴルは、高麗を侵入した。当時、崔氏武臣政權が権力を握っていた高麗朝廷は江華島への遷都を断行した。以後30年以上に及ぶ間、講和と戦争を繰り返しながら、モンゴルは講和の条件として、いくつかの事項を一貫して求めた。そこには、江華島に遷した都を再び開京に戻すことに対する要求(出陸還都)、王の親朝、納質、郵驛の設置、供戸數籍、助軍、兵糧調達、達魯花赤の設置など、モンゴルが征服地に要求した普遍的な事項が含まれている(これらは一般的に「6事」と呼ばれる)。これらの要求事項は、モンゴルが服属国を直接統治しなくても、その政治・軍事・経済に関する重要な問題を直接制御するために要求されたものである。

その中でも、本発表では、国王の親朝と納質要求を主に扱うことにする。本発表で特にこの二つの問題に注目する理由は、これらが、「モンゴルが、他の政治単位と関係を形成し、維持する方法、すなわち遊牧社会における政治的ネットワークの形成とそれが維持される方式」と関連しているからである。支配一族間の世代を重ねた通婚もこのような方法の一つであり、高麗王室もその対象となっていたが、それは元々、モンゴル側が高麗に要求した事案というより、高麗武臣執権者による国王(「元宗」)の退位という事件を收拾する過程で「突発的に」(高麗世子によって)提起され、実現されたことである。一方、国王の親朝と王室の子弟を「質子」、いわゆる「トルガク[禿魯花、turγax]」とする要求は、モンゴルがすでに戦争初期から行ってきたことである。

モンゴルが「納質」を要求した一次的な理由は、講和を介して戦争を終了させると共に、服属国の首長の子弟を「人質」としようとした両側面がある。しかし、戦争の終了という短期的「事

件」の後、両者の関係が長期的に持続する状況でトルガクとしてモンゴルに入ったいわゆる「人質_質子」は、通常、ケシク[怯薛、kešig]に入り、モンゴルの皇帝・皇室及び支配層と個人的な関係を形成し、新しい支配層として再教育される。これらの点は、その時期及びその後モンゴルに入った高麗宗室も同様である。

一方、講和のため、国王の「親朝」を要求したのも、政治単位首長間の直接的な関係形成に対する要求という点では「納質」要求と一脈相通することがある。モンゴルで政治単位首長間の直接的な関係が政治単位間の関係において重要な意味を持っていたのは、戦争で勢力の糾合と分裂が繰り返されていた遊牧社会の特性、そして分封を通じて設定されたモンゴルの国家体制の講和分立的・分権的性格と関係している。モンゴルにとって、戦争中の国、あるいは政治単位と講和を結ぶために、その国王、あるいは首長との直接的な関係（個人間・家系間の関係）を持つのが何より重要であった。その表現手段の一つが、首長たちが皇帝を直接面対して服属を表す「親朝」だった。また、これらの関係が持続的に維持するためには、首長一族の子弟をモンゴルに呼び、入侍させる「トルガク[秃魯花]派遣」が必要とされ、必要に応じて首長の親朝も継続的に行われていた¹⁾。これらの首長個人間・家系間の直接的な関係形成は²⁾、それまで主に使臣を媒介して間接的に行われる冊封と、朝貢という形を用いて行われる国家間の関係の形成方法に慣れていた高麗の立場では、異質なものであった。それに対して、高麗側ではこれらの事案に対して要求されたままの形ではなく、高麗なりの解釈を加え対応した。さらに、そのような対応が両者の関係の進展に応じて変化しながらも、高麗社会、特にその政治的環境に影響を及ぼしたことも、本発表でこの二つの問題に注目する理由である。

以下では、講和のための要求条件に含まれていた国王親朝と納質要求に対する高麗側の理解と対応について考えてみる。そして、そのような対応方式が両国関係の安定の後、どのように変化し、その変化の様相が反映する時期における「高麗-モンゴル関係」の特徴とその政治的影響についても簡単に説明する。

国王親朝要求の解釈と対応-宗室の外交活動：講和交渉の使行団引率

モンゴルは1231年（高麗高宗18）1次侵入の後、高麗が講和を結んだ状態で江華遷都を断行すると、これを理由に再び高麗を侵入してきた。そして撤軍の条件として国王が、モンゴルに来

¹⁾ そのためモンゴルにとって親朝は諸王・封君がカーンに臣服する象徴であり、これを拒否することは背反と認識された。モンゴルでの親朝、朝覲に関する詳細な内容については、以下を参照されたい。李治安、1989「元代分封制度研究」、天津古籍出版社、297-299。

²⁾ モンゴル支配層の個人間・家系間の関係の具体的な形及びその意味と関連についてはキム・ホドン、2010『モンゴル帝国と世界史の誕生』、トルベゲ、pp. 96-100を参照。

て直接皇帝に会うこと、つまり、親朝を要求した³⁾。これは、一次侵入以降国王の親朝なしに結んだ講和の不安定性が江華遷都によって顕著になったための要求であった。しかし、高麗側はあれこれ理由をつけ、これを受け入れず、以降もモンゴルの侵入と国王親朝の要求は引き続かれ、最終的には1258年、崔氏政権終息後、太子の親朝を通じて両国間の講和が実現された。

高麗側で国王が親朝要求に応じなかった理由には、心理的な抵抗と武臣執権期という政治的状況などが複合的に作用されたもので、高麗は国王親朝という、モンゴル側の要求を避けながらも、一方で、その要求に内在している安定的な関係成立には応じようと、それなりの工夫を凝らしたと考えられる。講和交渉の過程における宗室の活動と講和以降宗室が正使として活動していたことが、その事例である。

高麗の宗室が正使として使行団を率いる様相はモンゴルとの関係で現れるユニークな使行様相の一つで、この時期の高麗－モンゴル関係の一側面を示す事例とも言える。モンゴルとの関係で高麗宗室が使行団を率いた事例は以下の通りである。

〈表〉 高麗宗室が対モンゴル使行団を導いた事例（典拠：「高麗史」、「高麗史節要」）

番号	使行時期	人物	使行目的
1	高宗 26年(1339) 12月	新安公 王佺	戦争中の交渉
2	高宗 32年 10月 壬午	新安公 王佺	戦争中の交渉
3	高宗 40年 12月 壬申	安慶公 王滄	戦争中の交渉
4	高宗 44年 12月	安慶公 王滄	戦争中の交渉
5	元宗 元年(1260) 4月 丙寅	永安公 王僖	皇帝即位の賀礼
6	元宗 2年 4月 己酉	太子 王諶	アリクブケ (Ariq Böke) 平定の賀礼
7	元宗 6年 正月 乙未	廣平公 王恂	元宗親朝の時の厚意に対する謝礼
8	元宗 8年 11月 甲午	安慶公 王滄	新年の賀礼、日本招諭関連報告
9	元宗 11年 8月 戊辰	世子 王諶	聖節賀礼、ベ・ジュンソンの反逆の報告
10	元宗 13年 正月 甲申	濟安侯 王淑	「大元」国号制定の賀礼
11	元宗 14年 正月 癸亥	帶方侯 王激	祭祀・婚礼許諾の謝礼

³⁾ 高宗 19年 (1232) 11月に、モンゴル皇帝に送った、本当に表の内容のうち、皇帝の調書の内容を云々し、国王が直接朝覲する問題と関連した高麗側の立場を表明した部分があることを通じ、「高麗史」巻23、高宗 19年 11月) これに先立ち高麗に渡された、モンゴル皇帝の調書に国王の親朝を要求する内容があったことを知ることができる。高宗 19年 11月以前、同年 7月に、モンゴルの調書が渡されている。「高麗史」巻23、高宗 19年 7月に庚辰朔)

12	元宗 14年 閏6月 己未	順安侯 王悰	皇后・皇太子の冊立賀礼
13	忠烈王 即位年(1274) 9月 戊戌	濟安公 王淑	王女の下嫁・国王爵位継承の謝礼
14	忠烈王 12年 5月 庚午	濟安公 王淑	皇太子「眞金」の死亡の弔意
15	忠烈王 18年 閏6月 丙戌	世子 王璋	聖節賀礼
16	忠烈王 即位年(1298) 正月	平陽侯 王眩	禪位許可の謝礼
17	忠烈王 復位年(1298) 9月	中原侯 王昱	復位謝礼
18	忠烈王 29年 11月 戊寅	濟安公 王淑	前王の帰国要請
19	忠肅王 7年(1320) 6月 己巳	丹陽大君 王珣	皇帝の即位賀礼
20	忠肅王 8年 3月	丹陽大君 王珣	年号改正・太后冊封賀礼

高麗宗室が、モンゴル側に使臣として派遣された事例は、戦争中の交渉の過程で行われた4つの事例とモンゴルと講和が行われた1259年以降の16件の事例、計20件の事例が確認される。そのうち元宗在位期間中の事例が8件で、この時期に宗室正使派遣が集中していることが注目される。特に元宗代の最初の事例である元宗元年（1260）4月の使行では「高麗－モンゴル間」の講和が実現され、元宗が即位した後、初めてモンゴルに派遣した使行でもある。

モンゴルとの関係で宗室が正使として使行団を率いるようになった背景にはまず、このような事例が、通常、特別な事案と関連した儀式的使行だったということである。上記の表のように宗室が使行団を率いた事例には、新年・聖節の賀礼のような定例使行も含まれているが、皇帝の政敵平定賀礼や王室間の通婚成功の謝礼などの特別な事案の賀礼或いは謝礼のための使行が多数含まれている。

高麗が宗室を正使として派遣したのはモンゴルとの関係の初期における特別な意味と重要性を意味し、関連した使行の格を高めるための人選であったと推測できる。一般的に、外交のための国家間の使行で、「使臣」、特に正使の格は、使者派遣主体が相手国との関係においてどれ程の意味と重要性を与えているかを反映するものである。正使の「格」をどのような基準で選定し、構成するかは使行の目的と派遣主体及び対象によって異なる場合がある。高麗の前期、宋との関係で派遣された高麗側使臣を見ると、高麗では使臣の家の背景と官品、学識などを使臣人選の重要な基準として設定していたことが分かる⁴⁾。このように、宗室を正使として派遣した背景には、高麗が家の背景や官品といった「正使の格」の基準を最大限に高め、モンゴルとの関係において最大限の意味と重要性を付与しようとした側面があると考えられる。

⁴⁾ バク・ヨンウン、1995・1996「高麗・宋交聘の目的と使節の考察（上）・（下）」『韓国学報』21・22。

一方、このように宗室が正使として派遣された事例がモンゴルとの関係以前に観察されないのは、これらが関係を結ぶ対象であるモンゴルの影響を受けた側面があることを示している。その具体的な一面を高麗宗室の使行が始まった初期の状況を通して確認することができる。高麗の宗室が使臣として派遣された最初の事例は、1339年（高宗26）の新安公王侄の使行である。この使行以来、高宗代では全4回に渡って宗室使臣を派遣している。しかし、これらの使行には、その目的が明記されていないが、当時の戦争の過程で戦争終結の前提条件として、モンゴル側が要求していた国王親朝の問題と関連していると考えられる。

前述したように、モンゴルは2次侵入以降、講和の条件として、国王の親朝を要求した。以後1235年（高宗22）から開始された3次の侵入中、モンゴルは、高宗26年（1239）4月と8月二度にわたって使者を派遣して国王がモンゴルに親朝することを再度要求し、12月には、高麗が新安公王侄と少卿宋彦琦をモンゴルに派遣した⁵⁾。以降、高宗の次男であり、元宗の弟である安慶公王湑も1253年（高宗40）と1257年に、二度にわたってモンゴルに派遣された、これも当時新たに皇帝位に上がった憲宗モンケ（Möngke）が軍事的侵入と共に国王あるいは王子（太子であるとされる）の親朝を要求したことに伴う措置であった⁶⁾。要するに、宗室の使行は、モンゴルとの戦争の過程でモンゴルが継続的に要求した国王親朝を避けながら、モンゴルの圧迫から抜け出すための高麗側の臨機応変の一つとして開始されたものと考えられる。その後も高宗は、モンゴルの使者が王に江外で出迎えることを要求されるが自らは出迎えず新安公王侄を送って使者を迎えることにした⁷⁾。また、モンゴル軍が侵入してきて王と太子が直接降伏することを要求されたときにも永安公王僖を代わりに送った⁸⁾。

これらの宗室の使行は高麗側が期待したように、モンゴル側の国王や太子に対する親朝あるいは直接降伏の意味としては認められなかったようだ。1239年（高宗26）モンゴルに行った新安公王侄は翌年9月に戻ってきて皇帝が王の親朝を要求したことを再度伝え、安慶公王湑自身も「王子」だったため、1257年（高宗44）の「王子入朝」の要求による入朝にもかかわらず、翌年モンゴルは、再び太子の親朝を求めてきた。そして太子王僖（後に元宗）の親朝を通じて、漸く両国間の講和は成立された。つまり、当時モンゴル側は、国王・太子との直接的な関係を求めただけで宗室を使臣に送るように要求することはなかったが、前者に対して拒否感を持っていた高麗側⁹⁾は、モンゴル側の要求を「高麗の立場」で調整し、宗室を使者として派遣することになり、これらは講和後も同様であった。

⁵⁾ 『高麗史』 卷23、高宗26年4月、8月、12月。

⁶⁾ 『高麗史』 卷24、高宗40年8月己未、庚午、10月辛未、12月壬申；44年7月壬申、12月。

⁷⁾ 『高麗史』 卷23、高宗37年6月庚子。

⁸⁾ 『高麗史』 卷24、高宗45年6月丙申。

⁹⁾ 講和後も高麗側では国王の親朝に否定的な認識を示しているが、これは元宗5年、モンゴル側の親朝要求に対する高麗側の反応を通して確認することができる。（『高麗史節要』 卷18、原種5年5月）

自らモンゴルに入朝して講和を成功させた後、即位した元宗は、世祖クビライ (Khubilai) の即位を賀礼するために、モンゴルへの初めての使行団に宗室永安公王儁を派遣し、しばらくしてクビライが即位過程で競争したアリクブケ (Arīq Buka) との戦争で勝利したことを賀礼するための使行団には息子であり、太子であった王謹を正使として派遣した。そして、上記の表でも示したように、これらの使行はその後も数回続いた。自ら親朝をすることに対して拒否感を持っている状況で、また通婚など、「モンゴルの(従属)関係」の要素が介入されていない高麗-モンゴル関係において、元宗は伝統的に国家間の関係を媒介する主要な手段であった使行の格を高めることにより、モンゴルとの講和を維持しようとしていたと考えられる。これは、以前の使臣人選基準に基づき、使行団を率いる正使の格を最大限に高めることに、当時高麗側が認識していたモンゴルの立場とあわせて、宗室を使臣として登用するという高麗の工夫によってなされた。つまり、宗室の正使派遣は自ら太子として入朝した経験もあり、自分の入朝が行われるまでの過程をよく知っていた元宗が自分の立場から、過去高麗が経験してきた中国王朝との使行の様相に、モンゴルとの関係形成過程で見られた特徴的な側面をある部分収容し折衝した結果として生まれたものである。

これは、「モンゴルの(従属)関係」を基本にして高麗との関係を考えていたモンゴルと、東アジア的な関係に基づいてモンゴルとの関係を考えていた高麗の間に、未だに完全な同意・定着がされていないことを示していると同時に、そのような関係に悩まされた元宗と高麗側の視点も反映していると言える。このように元宗と高麗-モンゴル関係において、首長の個人・首長家との直接的な関係の形成と維持という、「モンゴルの(従属)関係」の要素は、それ自体の機能よりも定例・儀礼的使行という国家間の関係を介して間接的に表現されたのである。しかし、これらの側面は忠烈王代以降王室間の通婚や国王親和条のような直接的な関係が高麗-モンゴル関係に全面的に導入されて活用される過程で、徐々に減少していくことになる。

どころが、上の表で示したように、宗室を正使として派遣する事例は元宗代に集中的に現れ、忠烈王代以降、特に1298年忠烈王と忠宣王の間に発生した重祚事件後にはあまり現れない。それにはまず、忠烈王代以降、国王自らがモンゴル帝国と通婚したり、積極的に親朝に臨んだりして、個人間・家系間の関係を中心とした「モンゴルの(従属)関係」の要素が前面に浮上されることになり、あえて宗室の正使を派遣するという折衷案を使う必要がなくなった。これは言い換えれば高麗とモンゴルの関係において定例・儀礼的な使行が持つ重要性和意義が縮小されていく様相とも関連している。これらは、使行自体において実務使行の重要性和意義が増加した結果でもあるが、両国間の関係を安定させ、安定した関係を定期的に相互に換気・維持させる主な手段が使行、特に定例・儀礼的な使行の他にはなかった時期の国家間の関係とは異なり、高麗-モンゴル関係において高麗国王が、モンゴルの皇帝・皇室と直接結んだ関係等、高麗とモンゴルの関係を媒介する他の手段が非常に重要な意味を持って登場することになり、使行の格を高めて

関係の重要性を強調する必要が以前に比べて縮小された状況と関連している。

一方、忠烈王代以降宗室正使派遣事例が明らかに減少されたのは高麗-モンゴル関係において宗室が持つ意味と重要性の問題が関連していると考えられる。これは、この時期の高麗-モンゴル関係の性質とそれに基づいた高麗の権力構造の問題、また国王の位相の変化とも関連している。高麗-モンゴル間の関係は、冊封と朝貢という形を用いて形成される東アジアの伝統的な国家間の関係要素と通婚などを通じて形成されるモンゴルの（遊牧社会での）個人間・家系間の関係要素が相互に有機的に結合されている関係である。これらの関係に基づいて形成されたモンゴル服属期の権力構造における高麗国王の位相変化は大きく三つに分けることができる。①高麗国王のモンゴル皇帝の諸侯としての地位が外交秩序上だけでなく、高麗の内部においても実質的な意味を持つようになったということ、②モンゴルの皇帝権が実質的な最高権力として存在し、それとの関係（個人間・家系間の関係を含む）を使用して権力が付与される構造において、高麗国王は、モンゴルの皇帝・皇室と同じような関係を形成した他の権力主体と競争をしなければならなくなったこと、③最後に以上のような過程を介して王朝体制において高麗王室が持っていた血縁の正統性における権威の重要性が縮小されたことである。このような変化は、既存の冊封-朝貢関係において形式的に機能していた高麗・高麗国王の諸侯・諸侯としての地位が実質化したのに加えて、「駙馬」の地位や「通婚という関係」を通して「非常に特別だが、変動可能であり、多元的に形成される関係」に、高麗国王権がかなり依存することになったことも、「行省丞相」という地位を通して官僚としての属性がある部分、高麗国王の地位に移入された結果であると考えられる。このような王の地位の変化は、以前の高麗という政治単位の中で、独自の論理に基づいて最高権力として存在してきた高麗国王権が、モンゴル服属期に入り、その上位、そして競争関係の他の権力者との関係の中に位置づけになったこと、さらにそれにより発生した変化ということで「相対化」と表現することができる。

このような高麗-モンゴル関係とそれに基づいた権力構造は、1269年元宗復位過程を経て成立されたが、高麗国王と臣僚たちがモンゴルとの関係と、それに基づいた権力構造の全貌を認知し、活用していく過程は段階的に行われた。高麗国王と臣僚たちが、このようなモンゴル服属期の権力構造の特徴を完全に認知されたのは、1298年忠烈王と忠宣王間の重祚過程を通じてであった。この事件により、高麗国王と臣僚たちは高麗国王が皇帝と形成した関係に問題が発生した場合、国王が退位されることもあるということを確認し、以降忠肅王の時代に発生した瀋王擁立の動きの過程は、王室直系でなくても、彼らが皇帝・皇室と形成した関係が国王-皇帝の関係よりも密接して強固な場合、その関係に基づいて、国王に挑戦することが可能であることを示した事例である¹⁰⁾。このような状況で国王がモンゴルに派遣する重要な使行を宗室に引率させるのは多

¹⁰⁾ 以上、モンゴル服属期の権力構造についてはイ・ミョンミ、2016、『13～14世紀の高麗・モンゴル関係

少政治的にリスクになる行為であった。そのため、忠烈王代以降宗室を正使として派遣するケースが確実に減少した背景にはこのようなモンゴル服属期権力構造の認識問題も影響していると考えられる。

トルガク[禿魯花、turvaγ]の派遣と宗室のケシク参加

使行を通じた宗室の活動は、元宗代以降、特に忠烈王代重祚以降にはほとんど現れないが、高麗宗室の政治的・外交的活動は、他の通路を通して引き続き行われた。特に注目されるのが、モンゴルのケシク[怯薛、kešig]制度である。

高宗 28 年(1441) 4 月、高麗では顯宗の子孫である宗室永寧公王俊を王の息子であると「だまし」両班のご子息 10 人と共にトルガクに送った。これは、モンゴル側の要件である「6 事」のうちの一つである「納質」の要求に応えるものであると同時に、前年モンゴル側の国王親朝要求を補うための措置でもあった。以後王俊が王の息子ではないことが「発覚」するが、彼のモンゴル朝廷での活動が認められ、引き続きモンゴルに滞在しながら遼瀋地域の総管として務めることになる。高麗側の最初のトルカク派遣は上記のように、やや「曖昧に」行われたが、後にも、引き続きモンゴル側の要求に応じてトルガクが派遣され、トルガクとして派遣された高麗の宗室はケシクにも参加した。ケシクは宿衛のモンゴル式表現で、チンギス・ハーンと親密な関係にあり、信頼を受けた代表的なヌケール(nöker)家をはじめ、新たに服属した政治単位長の子孫や親族を含む、モンゴル帝国の親衛隊である。これはモンゴル帝国の主要な支配層を構成する集団であった。ケシクに他の政治単位長の子孫を召喚して参加させるのは、モンゴルの立場から、他の政治単位の服属を担保するための手段としての側面だけでなく、モンゴル支配層にしつねをするという意味もあった¹¹⁾。また、対象者の立場ではケシクに参加している間、モンゴルの政治勢力との交遊を介して、その政治的基盤を拡張することができる。

これらのことは高麗の場合も同様であった。若い年齢で即位した忠穆王と忠定王を除く高麗国王はすべて即位前、モンゴルにケシク生活を経験した。忠烈王は元宗 12 年(1271、世祖至元 8)から王位を継承した元宗 15 年(1274、至元 11)までに、重祚した忠宣王は忠烈王 16 年(1290)～24 年(1298、成宗大徳 2) 正月、そして同年 8 月に廢位された後、1308 年に復位するまで(武宗至大 1)、以降同年 11 月に、モンゴルに行ってから、チベットに配流される忠肅王 7 年(1320、英宗即位)までケシク生活を行った。忠肅王は忠宣王が復位し、ケシクに召喚され、王位を継承する忠宣王 5 年(1313、仁宗皇慶 2)までケシク生活を行なった、忠惠王も忠肅王 15 年(1328、

の研究-征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合位相の探求』慧眼、参照。

¹¹⁾ 森平雅彦、2001 年、「元朝ケシク制度と高麗王家 - 高麗・元関係における禿魯花の意義について」、「史學雑誌」第 110 編第 2 号。

天順帝致和1・明宗天曆1) から17年(1330、文宗至順1)までケシク生活をして王位を継承したが、忠肅王が復位するようになり、再度ケシクに召喚された。しかし、不誠実な生活を理由に忠肅王後5年(1336、順帝至元2)に高麗に帰国措置された。恭愍王もやはり忠惠王復位後ケシクに召喚されて1351年王位を継承するまでケシク生活を行った¹²⁾。

モンゴルのケシクに参加した高麗宗室は世子に限定されたわけではない。モンゴルとの関係序盤には王室の直系ではない人物がトルガクとして派遣されることもあったし¹³⁾、上記の高麗国王の事例の中でも、忠肅王と恭愍王の場合のように、「世子」ではない状態でケシクに召喚された事例が含まれている。忠宣王の次男だった忠肅王は忠宣王が復位した後、兄である世子王鑑と共に、モンゴルに宿衛として召喚された。モンゴル側が二人の王子を一緒に送信するように命令したからであった¹⁴⁾。恭愍王の場合も兄である忠惠王が復位した後、宿衛に召喚されたので、世子としてケシクに参加したわけではない。実現されたわけではないが、恭愍王即位後、忠惠王の庶子である釋器を召喚したのも、彼をケシクに入らせるためのものであった可能性が高い。

モンゴルが「世子」ではない高麗宗室を宿衛に呼び入れたのは、明らかではないが彼らを次期の国王位継承権者にする事で、万が一の場合に備えようとしたからだと思われる。高麗の臣僚たちはこのような形でモンゴルのケシクに入られた宗室を事実上、次期王位継承権として認識していた。これは高麗臣僚たちが「王祺(後の恭愍王)がケシクに入れられたとき」、彼を「大元子」と称していたことから推測できる¹⁵⁾。「元子」というのは、元々王の長子を指す言葉で「元子=世子」、または「元子=王位継承権者」を意味するものではない。ところが、当時高麗の臣僚たちは忠惠王の弟である王祺をあえて「大元子」と称したのは、彼が「世子」に冊封されたわけではないが、モンゴルで宿衛をすることになった次期継承権者であると認識していたことに起因する。このように、モンゴルのケシク制度が高麗に王位継承候補資格を提供し、その政治的環境を助成する制度として認識され、機能していたため、それまで同様の役割を果たしていた高麗の太子制度には変化が見られた。

光宗代に導入された高麗時代の太子制度は大きく冊封と東宮官運営に分けられる。通常在位中の王[現王]の長男を太子に冊封することにより、血縁の正統性を基盤として権威が与えられる場合、東宮官の任命と運用は、彼が即位した後、「事前に」国王として王権を行使するための政治的環境を与えてくれる。太子の教育と護衛を担当した東宮官は、それ自体が太子の王として

¹²⁾ ケシク参加期間は、代替的なもので年度単位を中心に表示し、一時的に帰国した期間は、表示しなかった。高麗国王の即位前のケシク参加状況及び考慮宗室のケシク参加状況の具体的な内容については森平雅彦の上記の論文(注11)、2001年を参照。

¹³⁾ モンゴルとの講和が行われる前である高宗28年(1241)、モンゴルにトルガクとして行った永寧公王縉、忠烈王の帶方公王澂及び彼の息子である中原公王昱などがそのような事例である。その他、忠宣王から瀋王位を継承した王暲とその孫として瀋王位を継承した王篤染不花もケシクに参加した。

¹⁴⁾ 「高麗史」巻124、尹碩傳。

¹⁵⁾ 「高麗史」巻38、恭愍王叢書忠惠王後2年5月。

の資質育成のためのものであるが、後に国王が統治を行う過程において官僚との関係を予め形成することを可能にする制度でもある。東宮官に任命された人物は、通常、任命当時高位官職を兼ねている場合も多く、そうでない場合でも、太子が王位に上がった後、高位官職に就いていたことが確認できる¹⁶⁾。さらに、太子制度は後継を取り巻く政局分裂の可能性を遮断するという面で現国王の政治的基盤を安定させるためのものでもある。太子の冊封が王によって行われるということが決定的ではあるが、東宮官の構成においても以前の説明で分かるように太子の政治的且つ人的基盤は事実上現国王にあったと思われる。

このような高麗の太子制度はモンゴルとの関係によって多少変化することになる。まず、格式な面において高麗の王位継承権者である太子が諸侯国の位相を反映して「世子」に格下げされた。一方、高麗前期の事例では、太子の冊封は順次に行われていたものであり、通常現王の長男を太子にして[立太子、爲太子]、東宮官を任命して太子府を構成し、教育をさせた後、適切な時期に、彼を太子に冊封した[冊太子]。太子を立てた[立太子]後、太子を冊封する[冊太子]までの時差は多様である。元宗代から忠烈王代までの世子制度運用は高麗前期と同じ様相を示す。しかし、このような「世子制度」は、忠宣王代に入ってから大きく変化され、王権と王位継承の過程を安定させるための機能を失い、正常に運用されなくなる。

忠宣王の長子の王鑑と次子の王燾（後に忠肅王）はそれぞれ1310年（忠宣王後2）正月と1313（忠宣王後5）3月に「世子」として王位を継承した記録から両方ともに世子だったことが確認できる。彼らが世子になった時期は、王鑑の場合、忠宣王が復位した1308年8月以降1310年正月前、彼の弟の王燾は王鑑が死亡した1310年5月以降、「世子として王位を受け継ぐ」1313年3月以前であったと推定される。ところが、忠宣王の二人の王子に関して、特に王位を継承した忠肅王については、その冊封と関連する記録だけでなく、その世子府の構成の記録が見当たらないことに留意する必要がある。これらは、以降の世子にも同様である。

忠肅王の長子である、世子の王禎（後の忠惠王）については、彼が1328年（忠肅王15）に「世子として」モンゴルの宿衛に行ったことは記録として残っているものの、やはり世子冊封や世子府構成などについての記録は確認できない。そこには、忠肅王が瀋王との紛争の時、モンゴルに召喚されて1325年になって漸く高麗に帰国できたことが影響していると考えられる。しかし、その後1328年に王禎が世子として（宿衛のために）、モンゴルへ行くまで、3年程の時間があり、瀋王との王位継承紛争の後も政局安定のための政治的行為として世子冊封や世子府設置などが必要だったと考えられるが、関連する記録が見当たらないという点は、先行した元宗代や忠烈王代の王世子冊封及び関連制度の運営の様相と対比されるところである。

忠惠王の長子であり、王位を受け継いだ忠穆王には「世子」という記録が確認されない。忠穆

¹⁶⁾ キム・チャンギョム、2008年、「高麗顯宗代東宮官インストール」『韓国史官報』33。

王が即位した当時8歳だったことを考慮すれば、子供の年齢のために忠恵王の在位時に「まだ」世子として立てられなかったら可能性がある。さらに、忠宣王が復位した後、長男を世子に立てたが、実質的な政治基盤を確保するための世子府の設置や世子の地位を確定する世子冊封などは事実上行われていなかった。もちろん、これらのことは、記録上の問題である可能性もある。しかし、現国王の公式王位継承者としての太子-世子が持つ位相を考慮すれば、世子を冊封する儀式は、それ自体が重要な意味を持つ。また、太子の冊封礼の後、関連赦免令を下したり、太子の誕生日を節日として記念するなど、高麗前期の前例と比べたら、実際の冊封が行われたとしても、その記録を残さなかった当時の状況は、それなりの意味を持っている。一方、忠定王と恭愍王が「先代王[前王]」の息子ではなかったことも、「世子」になれなかった理由の一つとして考えられる。

このように、特に忠宣王代以降、太子/世子制度が適切に運用されなくなったのは、この制度の基底にある王位継承に関する高麗伝来の観念が持っていた権威と規定力がモンゴルとの関係において弱体化されたのに起因する。このような変化は、当然のことながら高麗王権をめぐる政治的環境にも大きな変化をもたらした。

伝統時代の王朝体制で太子が国王に次ぐ権力を持ちながらも王権への脅威にならないのは、彼の権力が国王によって託されたものであり、太子の政治的基盤が国王のそれと直結されていたからである。しかし、次期王位継承権者が高麗におらず、モンゴルの朝廷でケシクに参加することになり、国王は自分の後継が独自勢力を形成する過程をコントロールできなくなった。太子制度を通じて構成された太子の政治的且つ人的基盤が国王の支配圏に含まれていた時に比べて、ケシク制度で設定された世子あるいは継承候補者の勢力基盤は王のそれと重なりを見せながらも違う部分もあった。そのために、宿衛期間とその能力に応じて、宗室の勢力基盤が独立に拡大することが可能となった。

また、この時期に繰り返されていた継承紛争の過程で国王が廃位される事態が相次いだが、高麗国王は前国王の身柄も掌握できなかった。それぞれ1298年と1332年に、モンゴルで廃位された忠宣王と忠恵王は両方、モンゴルに召喚され、宿衛期間を再度経た後、それぞれ父王が死亡してから復位した。1332年に廃位後、再びケシクに入った忠恵王が不誠実さを理由に帰還措置されたことを見ると、彼らをモンゴルに召喚し、ケシクに参加させたのは「再教育」の意味が大きいと思われる。ところが、モンゴルの意図とは別に、廃位された国王の上記のような措置は、「前王」の身柄を「現王」が掌握できなくするとともに、「前王」の復位可能性を残しておくことにより高麗の権力の中心を二元化させ、国王権を制約する結果をもたらした。いわゆる「反元改革」を断行した恭愍王が、モンゴルが召喚した忠恵王の庶子である釋器に反逆罪をかぶせて誅殺しようとしたことや、その後、モンゴルにいた忠宣王の孽子である徳興君塔思帖木兒の送還を要求したこともすべてこれらのモンゴル服属期における権力構造を克服しようとしたものであ

る。

一方、ケシク制度は、国王をめぐる政治的人間関係網、すなわち臣僚たちとの関係にも影響を及ぼした。世子あるいは王位継承の可能性を持った宗室がモンゴルに宿衛する過程で、高麗臣僚たちが彼らを随行することになり、これらは以前太子府東宮官と同じような役割をするようになった点に注目する必要がある。つまり、王位後継者が高麗の現政権と密着した高麗臣僚たちとの関係を通じて政治的基盤を磨くのではなく、離れた地域であるモンゴルで、場合によっては10年にも及ぶ長期間、随行する臣僚たちと関係し、またはモンゴル内の勢力と関係し、政治的基盤を構成するようになる。このような随従臣僚たちは彼らが随従した人物が王に即位した後、いわゆる「側近勢力」として、主要な政治的基盤として活躍したのも周知の事実である¹⁷⁾。

これらの随従臣僚たちの中には、彼ら自身がケシクに参加したりする場合もあったが、これらのケシク参加は、臣僚当代に限らず、その子弟に受け継がれ継承された。つまり、モンゴルとの関係で高麗国王が自分の核心的且つ政治的人間関係を形成する重要な通路の一つであったケシク制度は、一方では高麗の臣僚たちが国王の制御から外れ、皇帝権と直接的に繋がることを恒常的・構造的に可能にしたのである。既存のような国王を頂点に形成された高麗の政治的人間関係網が皇帝を中心に再編されたものである。

結び

モンゴルは高麗との関係において既存の東アジアの国際社会で国家間の関係を規定していた(形式的な側面で)、いわゆる「冊封-朝貢」という儀礼的形式に加えて、遊牧集団間の関係維持において重要な意味を果たしていた首長や首長一族間の直接的な関係を形成するいくつかの方法を適用させようとした。30年に及ぶ戦争の過程で講和の条件として提示された国王親朝と質子-トルガク派遣要求は、そのような過程で生まれたものである。このような要求に対して高麗は、積極的にそれに応じることなく、自分たちが慣れてきた国家間の関係をベースに、それなりの解釈を加えながら対応を行った。その中でも、モンゴルとの関係以前にはほとんど現れなかった高麗宗室及び太子の政治的・外交的活動に著しい変化が生じたのである。

高麗-モンゴル関係の初期における宗室や太子/世子の政治的・外交的活動は、主に「高麗對モンゴル」という関係の構図の中で高麗側の利害関係を反映して行われた。戦争当時講和交渉の主体として取り上げられたり、関係の序盤に正使として使行団を引率した宗室の活動もこのような意味として行われたものである。また、初期のトルガクとして派遣された傍系宗室や太子/世

¹⁷⁾ モンゴル服属記の側近勢力については、キム・グァンチョル、1991年、「高麗後期世族層研究」、東亜大学出版;イ・イクジュ、1996年、「高麗・元関係の構造と高麗後期の政治體制」、ソウル大学国史学科博士學位論文を参照。

子の活動もやはり、このような文脈で理解することができる。しかし、両国関係の展開とモンゴル皇帝権を実質的に左右する権力構造が形成されるにつれ、これらの側面も変化を見せることになる。

つまり、実質的な最高権力である皇帝権との関係に基づいて権力が付与されるにつれ—これらの「関係」には「1:1」で結ばれる「君主対君主」の関係だけでなく、「1:多」で形成される「個人間・家間」の関係も含まれて—高麗国王は、国王になり、その地位を維持して王権を行使するためには、自ら、モンゴル皇帝・皇室との関係に依存しなければならず、同じような関係を形成した他の権力主体とも競争しなければならない状況に置かれた。また、世子がモンゴルでケシク生活をするようになるため世子の身柄とその政治的人間関係が高麗国王の制御範囲を脱することになり、重祚が頻発する中、廃位された国王も、まずはモンゴルに召喚され、ケシクに入られる。また、現国王においても廃位されたら前国王の身柄を自ら掌握することができなくなる。つまり、モンゴルとの関係及びそれに基づいた権力構造のため、高麗宗室や世子は高麗国王と異なる政治的立場をとる存在となったのである。

そのため、宗室正使派遣のように、高麗側でモンゴル側の要求にそれなりの解釈を加えて進行していた部分は確実に減少していく変化を見せた。しかし、モンゴルが他の政治単位との関係で普遍的に運用し、帝国運営の根幹にもなったケシク制度を通じて宗室/世子の政治活動は維持されるしかなかった。つまり、首長個人間あるいは支配一族との間の直接的な関係を通して、政治単位間の関係が形成・維持されていたモンゴルの関係形成方式は高麗においても適用され、これは高麗王権を取り巻く環境に変化をもたらし、そのような変化は高麗-モンゴル関係の中で発生したいくつかの政治的事件を発生させた構造的変化であったと見なすことができる。

〈参考資料〉 モンゴル服属期の高麗国王の位継承図

